

へき地にロマンは埋まっている

医療法人社団弓削メディカルクリニック
滋賀家庭医療学センター理事長
雨森 正記
(滋賀県8期)



I. はじめに

へき地にロマンは埋まっている。

外からは見えない。

掘ってみたら宝物かもしれないし

人によっては地雷かもしれない。

地雷も人によっては宝物に変えられるかもしれない。

私は自治医科大学を昭和60年（1985）に卒業した8期生であり、卒後5年目の平成元年（1989）に滋賀県竜王町に赴任し、現在まで32年間同町の診療所の医師を続けている。最初の10年間は同町の国民健康保険診療所に勤務し、その後勤務していた診療所を買い取る形で医療法人社団弓削メディカルクリニック（以下当院と略す）を開業し22年余りになる。赴任した当初は人口12000人余りの町に診療所が3件あったが、数年で他の2件の医師が相次いで亡くなり、医師は私一人しかいなくなった時期もあった。しかし、その後継続して診療するうちに、当院は常勤の医師が11名という西日本最大の診療所になった。それは、当院が、単なる診療にとどまらず「総合診療・家庭医療」の教育施設として活動して来たからに他ならない。その様な施設を運営し、行政とも連携し県内での総合診療医の養成を主導している立場から、自治医科大学には以下の4項目について提言しお願いしたいと考えている。

1. 卒前から卒後にかけて総合診療医の養成を行う
2. へき地勤務がステータスになるようにする
3. へき地でも働きやすく学びやすい環境を作る
4. 全ての都道府県に総合診療・家庭医療の統括施設を構築する

順を追って説明する。

II. 提言1：卒前から卒後にかけて総合診療医の養成を行う

これまでから、自治医科大学だけでなく他の大学の医学生の実習の受け入れも行ってき

た。その中で感じることは、自治医科大学の医学生の地域医療に対する意識の高さが他と比べて際立っているということである。これは医学生が各自自分の将来について入学時から真摯に受け止め、長期休暇中も出身県などで実習を行うことで各都道府県の自治医大卒業生と触れ合う機会を持ち、場合によっては先輩をロールモデルとして考えていることに加え、自治医科大学が適切な教育を行っていただいているものと感謝している。

日本プライマリ・ケア連合学会では、家庭医療・総合診療に興味を持っている全国の医学生を集めて、毎年8月に「学生・研修医のための家庭医療学夏期セミナー」を開催している。私はその会に20年来参加してきたが、20年ほど前までは自治医科大学の医学生の参加は皆無であった。しかし、最近、自治医科大学の医学生の参加が急増しており、その中からセミナーの中心的な役割を担う方も次々出現して来ている。これは在校生の中に自分たちの将来像として家庭医療・総合診療を学びたいという意欲のある方が増えて来ていることの現れであり大変心強く思っている。

しかし、卒業後に希望しても総合診療専門研修プログラムに加入することができる都道府県は限られており、へき地義務が専門研修に認められないことも少なくない。それは36年前に卒業した私たちの頃と何ら変わりがないと言わざるを得ない。自治医科大学は、卒業してしまってもう知りませんということではなく、卒業生が希望する場合には各都道府県で総合診療専門研修を義務年限内に受けられるように行政や専門研修を行っている施設と連携を取れる様な仕組みを考えていただきたい。

なお、滋賀県では当院が行政と連携することで、自治医大卒業生も義務年限内に総合診療専門研修を受けることができるように考慮されており、本年3月に1期生として2名の自治医大卒業生が研修を無事に終了し、また2名が現在も研修中である。全国のモデルとなる取り組みであると考えているが、これまで自治医科大学からは当院へはその取り組みについての連絡や問い合わせは一度も受けたことがない。

Ⅲ. 提言2：へき地勤務がステータスになるようにする

平成30年（2018）から総合診療専門医が基本領域の専門医として認められ専門研修が始まった。その中で、総合診療専門研修Ⅰ、Ⅱという診療所、小病院研修、病院総合診療部門での研修が18ヶ月必修となった。これまで、へき地病院、診療所の勤務は専門医のプログラムからは外れ、全くの義務のみで勤務する期間で、私が赴任した頃は「捨て石」とまで言われるような状態だった。それが専門研修と認められ、「総合診療専門医」というステータスを得るために必要な期間にカウントされるようになったというのはまさに画期的な変化である。自治医科大学は是非とも全ての都道府県で卒業生が望めば「総合診療専門医」となれるような環境とコースづくりの後押しをしていただき、へき地診療の経験が単なる捨て石となるのではなく、重要な研修を積んだというひとつのステータスとなるように尽力していただきたい。

私が学生だった1980年代前半に、我が国でも「家庭医」を専門医として認めるべく研

修プログラムを構築しようという機運があった。卒後5年で僻地診療所に赴任することがあらかじめ決まっていた私にとって、卒業後にそのような研修を受け、診療所での医療を経験することで「家庭医」という専門医のお墨付きがいただけるということに大いに期待していた。しかしながら、そうはならなかった。28歳で一人診療所長として赴任した時、何らかの自分の気持ちの後ろ盾となる「お墨付き」が欲しかった。そのような苦い経験をしているからこそ、自治医科大学を卒業した後輩たちが誇りを持って僻地医療に従事していただけるような「総合診療専門医」となれる環境を構築するように私は尽力してきたつもりであり、今後も尽力を続けたい。

また、昨今、日本専門医機構の中で総合診療専門医を安易に増やそうとする動きがあると伺っている。自治医科大学の関係の各位におかれましては、卒業生が誇りを持って活動していただけるレベルの高い専門医としての「総合診療専門医」の構築にご尽力賜り、決してレベルを下げるようなことのないように監視していただきたいと強く思う次第である。

IV. 提言3：へき地でも働きやすく学びやすい環境を作る

働きやすく学びやすい環境を作るためにはグループ診療は不可欠である。もともとへき地義務で赴任した町であり、医師が私1名になった時もあったが、最近では毎年当院には複数名の総合診療専攻医、指導医ら若い医師が集まって来ている。それは経済的な誘導ではなく、若い医師が働きやすく学びやすい環境を当院が作ってきたからに他ならない。現在、当院ではグループ診療を行っており、「医師の働き方改革」に沿った勤務体制をとるとともに、医学生、初期研修医、専攻医、他科転向・開業前研修医の教育体制を整え、指導医とともに学べる体制を構築してきた。余裕を持った働き方を実践しながら満足のいく学びを提供するということが必要と考える。

これまでへき地診療は、多分に赴任した医師の自己犠牲により成り立ってきた。またそれを美化し改善するための体制を確保することを怠ってきた。長年奉仕を続けていた医師が辞職する際に次の医師が確保できないリスクは大きい。そのため医師1名でのソロ診療ではなく複数医師によるグループ診療を進めなければいけない。当院では、グループ診療を行いながら、滋賀県内3ヶ所の医療資源に乏しい地域の診療所の支援を行なっている。今後は複数の医師で複数の診療所の運営を行うようにして経営のリスクを下げるようにすべきである。自治医科大学は、医学生の臨床能力やへき地医療の親和性を高めるのはもちろんであるが、赴任先で困らないような環境の構築に意見するようお願いしたい。

V. 提言4：全ての都道府県に総合診療・家庭医療の統括施設を構築する

当院は、総合診療・家庭医療研修プログラムの基幹施設として総合診療専攻医の教育を行って来た。連携研修施設として適切な指導医（自治医大卒業生）が勤務している診療所・小病院（総合診療専門研修Ⅰ）、総合内科、総合診療科（総合診療専門研修Ⅱ）に専攻医を派遣することで、連携施設のグループ診療の構築とへき地診療の支援を行っている。滋賀

県庁の担当者には大変理解していただいております。総合診療専門研修を希望する自治医大卒業生は、当院が私的医療機関であるため当院には勤務することはできないが、勤務先の病院、滋賀県庁、当院との三者が連携することで総合診療専門研修を履行することができるようにしている。その中で当院もビジネスとして成立する様に経営的な努力を続けている。

今年度から全国の六大学に「総合診療医センター」が設けられている。厚生労働省の「総合的な診療能力を持つ医師養成の推進事業」として、総合診療医を養成する拠点として大学に設けられたものである。この中のいくつかの大学のセンター長には自治医大卒業生が任命されており、大いに期待しているものである。この機関は、私の提言を具体化するものと期待しており、今後は他の県でも同様の総合診療医センターが設立されて自治医大卒業生が中心となって活躍をする場所となっていただくために後押しをしていただきたい。

VI. 終わりに：へき地にロマンは埋まっている

今から40年前の昭和56年（1981）11月に少女雑誌「りぼん」に清原なつの氏作の「私の保健室へおいで・・・」という漫画が掲載された¹⁾。詳しくは現在でも手に入る本を購入して読んでいただきたいが、作品中に「へき地へいくんだったらやっぱり自治医大がいいのかなあ」というフレーズがあり、在校生の中では大変話題になった記憶がある。その作品の中で自治医科大学は「僻地に向かう医師を養成するというふれこみで発足した法人運営医大」と注釈されている。当時、私たち8期生は大学3年、1期生が卒業5年目でへき地に赴かれたばかりの頃であり、自治医科大学を卒業しても実際にへき地勤務する前に義務を返上してしまう卒業生が多く出るのではないかと世間は懐疑的だったのである。

また同時期に発表された映画「ヒポクラテスたち」の中では、「そのうちに医者なんてダブダブに余っちゃってしょうがなくなるへき地行っただめだよ今ちゃんと自治医大からへき地に医者が来ることになるとるんだから」というフレーズがあった²⁾。自治医大卒業生が送り出されて何年か先にはへき地にも医師は充足されてしまい、自治医科大学も消滅するということがまことしやかにささやかれていたのである。40年前のそのような事実を現在の在校生や若い卒業生は誰も知らない。

へき地にロマンは埋まっている。

外からは見えない。

掘ってみたら宝物かもしれないし

人によっては地雷かもしれない。

地雷も人によっては宝物に変えられるかもしれない。

令和元年になった月である2019年5月17-19日に国立京都国際会館において、第10回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会、WONCA APR（世界家庭医学会 アジア太平洋州会議）が開催された。そのメインシンポジウムで学術大会長だった私は「へき地医療に

ロマンはあるか？ 自治医大卒業生の40年」という企画を行った。1期生がへき地医療の現場に出てから40年になることから、後に続いた同窓生とともにこの40年を振り返り、今後のへき地医療に赴く方へのエールとして企画したものだ。座長は私と古屋聡先生（山梨市立牧丘病院 山梨県10期）が行い、シンポジストとして奥野正孝先生



（三重県1期）、吉嶺文俊先生（新潟県立十日町病院 新潟県8期）、中村伸一先生（おい町国民健康保険名田庄診療所 福井県12期）、白石吉彦先生（隠岐広域連合立隠岐島前病院 徳島県15期）という50歳以上の自治医科大学同窓生にお願いした。そのシンポジウムでの結論がこれだった。

これから先、40年、50年後、日本のへき地を取り巻く状況も予想できないし、自治医科大学が存在し続けているかどうかもわからない。しかし、これからも自治医大卒業生がへき地に埋まっているロマンを求めて後に続いていただけるような環境づくりを自治医科大学、行政、地域の人々で行っていきたいと思っている。

参考文献

- 1) 清原なつの 私の保健室へおいで・・・、私の保健室へおいで・・・ハヤカワ文庫 333-374 早川書房 2002
- 2) ヒポクラテスたち 大森一樹監督 キングレコード株式会社 1980